

マガジン 150 号発行記念

研究室の情報発信のあり方について考える

How to Inform the Lab Activities



本号で都市デザイン研究室マガジンが 150 号を迎えました！マガジンの発行も 6 年目を迎えました。その間にプロジェクトも倍増し、また社会への情報発信のあり方も大きく変わってきております。そこで、その記念として特集記事を企画しました。この記事では、都市デザイン研マガジンの役割を改めて問い直すとともに、200 号へ向け、これからの研究室の情報発信はいかにあるべきかを、考えてみたいと思います。

研究室の先生方から



都市デザイン研究室
教授 西村 幸夫

研究室マガジンが 150 号を迎えることになったとのこと、嬉しいです。創刊号が発行されたのが、2005 年 4 月 15 日ですから、すでに 6 年を超しているということになります。当時、研究室に研究生として所属していた酒井憲一さん（元朝日新聞記者）が、研究室からの情報発信と研究室内の情報共有を目的に自主的にマガジンを発行され、それが研究室の伝統となっていったのが、いまの研究室マガジンです。発刊から今日まで月 2 回の刊行ペースをほとんど遵守してくれたのは、歴代編集長と編集スタッフの努力の賜物です。いつもありがとう。そのうえ、創刊号から今手元にある最新号、149 号の号外である 149.9 号まで、研究室のホームページ上で一覧できるのも、情報時代のたまものといえるでしょう。こんな一覧性は、つい 20 年前はまったく想像さえできなかったことです。それが今日では、新しい情報発信の武器となり、さらには情報ストックの欠かせない手段となっているのでしょう。この間、研究のプロジェクトは増え続ける一方で、今や何らかの整理が必要なところまで来ています。それにともな

「活動の背景にある atmosphere を、読み手に伝えてほしい。」

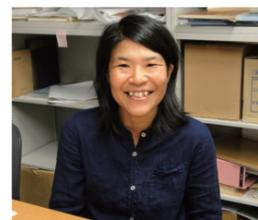
会議の原則は、落としどころがないことだ。プロジェクトの行く末や調査の結果は、誰にも見えていない。見えていないからこそ調べてみるのであり、議論を続けるのであり、そうした過程を共有してようやく合点の行く方向性が立ち現れてくる時がある。連日の長時間ミーティングは、研究論文を読んでどんどん新しい情報を身につけていくよりも、時間をうまく使えていないと感じることもないといえぬ嘘になる。しかしそうした時間が、情報をこえた創造的な知識を生み出しているのは明白で、都市デザインの仕事が創造的でないことはあり得ない（もち

「今後も熱心な、そして願わくば最初の、読者でいたい。」

って、対外的な情報発信の重要性もさることながら、研究室内部の情報共有の手段として、日々使われるようになってきたということが言えると思います。私自身、研究室マガジンの熱心な読者です。しかし、おもしろいことに、内部的に重要なものが、外部にとっても役に立つ、そうしたことが言えそうです。大学院に都市工学専攻を選び、さらにその中でも私たちの研究室を目指してくれる学生諸君の多くは、この研究室マガジンを読んで、関心を深めてくれています。

できれば、もうすこし英文版や、そこまできなくても英語での記事が増えるといいですね。留学生の目からみた「私の好きな東京」といったシリーズは、私自身が読んででも外国からの視線ではそのようなもの見方ができるのか、とても新鮮です。研究室 OB もよく目を通してきているようなので、OB の活躍を紹介するような欄もできるといいと思います。

今後も熱心な、そして願わくば最初の、読者でいたいと思います。編集部の活躍を期待しています。



都市デザイン研究室
准教授 窪田 亜矢

ろん改善すべきは改善しましょう！）。情報と知識は全く別のものである。ではマガジンの具体的な役割は？と問われれば、私たち都市デザイン研究室メンバー一人一人の風体と、研究室としての活動の背景にある atmosphere を、読み手に伝えてほしいと思っている。どんな人たちが、何につまずき、どう乗り越えようとしているのか。

私たちがやっていることは、まさにコミットすることだ。匿名ではなく、どんなチームでありメンバーなのか、常に自己紹介しておく必要がある。今のマガジンはそうした役割を担ってくれていると思う。



都市デザイン研究室
助教 永瀬 節治

Carrying out compelling projects all across Japan that tackle the various societal problems Japan is confronted with is a rewarding experience for graduate students. A more active #Twitter and #Facebook use of project members could be a way, however, to better communicate our projects to a

研究室の学生からの声

他大学の似たような専攻の人も HP を見ているし、院試の際に HP で調べてくる学生も多い。建築学科の中に都市計画がある大学が多い中で、都市工学科の中の都市デザイン研究室は稀有な存在であり、もっと HP の情報発信を強化すべき。

M2 吉田

プロジェクトごとにツイッターのアカウントを持ち、それを交互にフォローし合って、外部も内部も広くプロジェクトの最新情報に触れられるようにしたらよい。

M2 山重

プロジェクトの調査やイベントのような節目をマガジンで扱うことが多いが、何を考え、議論しているか、そうした動いている面白さを共有できるようになれば良いと思う。

M2 前川

各プロジェクトごとにマガジン上で情報発信があると良い。ツイッターなどで日本、世界の学生や団体とつながると良い。

M1 仲村

HP でのプロジェクト紹介を充実してほしい。そうすれば院試の外部対応もし易い。

M1 北川

プロジェクトは一定の成果が上がれば報告すべきか、それとも調査・思考の過程をこそ発信すべきか。もちろんどちらも大事ではあるが、後者は特に発信するのが難しい内容だ。次の日には考え方が変わっているかもしれない。しかし、悩む過程を発信することで、研究室の仲間や、さらには OB・OG の方から有意義なアドバイスをもらえるかもしれない。そうした情報発信のあり方も一案だと思う。

M1 大森

wider public and to help spreading a greater interest in urban design. Students could post interesting news about their project work, or about forthcoming events and seek to engage in pro-active urban design discussions in the virtual public sphere of social media.



都市デザイン研究室
特任研究員
Christian Dimmer

紙媒体が好きなので、マガジンの発行を毎回楽しみにしていますが、情報の新鮮さや発信頻度が twitter などに劣るのも事実です。情報の内容に応じていかに発信手段を使い分けられるかが重要なのではないのでしょうか。

M1 松本

今のマガジンは学生が発行している割には、内容が堅苦しい。もっとフランクな内容や文体でもいいのではないかと。

M1 安東

紙媒体であるマガジンにこだわってほしい。情報過多な時代だからこそ、すり抜けず、記憶にとどまる情報が必要だ。マガジンはもはや都市デザイン研究室の文化であり、重要なコミュニケーションツール。卒業してもマガジンを読んで、研究室時代を懐かしみたい。

M2 村本

本号で都市デザイン研マガジンも 150 号を迎えます。これも、ひとえに皆様の日頃よりのご愛読のお陰と心より感謝いたしております。さて、本号では身近な読者である研究室のメンバーにマガジンへ対して、「今後の情報発信のあり方、そして 200 号に向け、都市デザイン研マガジンはどうあるべきか、」というテーマでメッセージを頂きました。様々な意見が寄せられましたが、もはや伝統と言える都市デザイン研マガジンに対する思いを聞くことができました。今後も、現代的な情報発信も行い研究室の活発な活動を発信しつつも、創刊から貫く「紙媒体へのこだわり」と「主体性のある記事作り」という信念を忘れず、研究室内外の人と人をつなげられるよう邁進していきたいと思っております。今後ともご愛顧のほどよろしくご祈り致します。

都市デザイン研マガジン第 7 代編集長 M2 矢吹 剣一

プロジェクト報告

PJ 現地調査 (7月上旬)

Field Surveys

梅雨明けとともに気温も上がり、夏本番がやって来ました!! そんな中でも研究室のメンバーは日本各地で調査・研究に励んでおります。その熱い活動内容をお伝えします。

佐原 SAWARA-project プロジェクト

text_matsumoto



▲地震の影響で崩壊した瓦



▲現在は希少な小江戸瓦

7月2日(土)、3日(日)に佐原PJの現地調査を行いました。今回は重伝建地区およびその周辺の商店経営者を対象として、震災に関するアンケート調査を行い、2日間で66部のアンケートを配布しました。あまり回答が得られないのではないか、という配布前の不安に反し多くの方が快く協力して下さい、興味深い回答を得ることができました。また、重伝建地区には観光客の姿も多く見られ、震災前の日常を取り戻しているようにも感じられましたが、いまだ瓦が崩落してブルーシートが掛けられた建物もあり、伝建修復の難しさを痛感しました。商店を回る中で直に聞くことができた、佐原のまちを思う人々の声をいかにこれからの活動に反映させていけるかが課題だと考えています。

M1の活動

デザ研に来て3ヶ月

Three months has gone...

本郷 HONGO-project プロジェクト

M1 仲村 貴文



▲マップとしての実用性を検討



▲湧き水が豊富な根津神社

4月下旬、新入生恒例の都市空間を読み解くプロジェクトとして本郷プロジェクトが始動しました。東京大学を対象地として文献等を読み進め、大学の成り立ち、周辺地域の本郷の歴史を探るとともに、実際の都市空間と照らし合わせながらまちのあり方を考えていく作業をおこなって来ました。具体的にはキャンパスを実際に歩き、古地図や文献で気になった点や自分たちが気付いた面白い空間を探しながら、9月19日(月)~21日(水)に行われるAPSA(Asian Planning Schools Association)用キャンパスマップを成果物として作成します。実際に地図や変成を調べて行くと、赤門の移動や時代による建築様式の変化などなかなか興味をそそる内容が満載で面白いマップができるのではないかと考えています。マップに興味がある方は、9月のAPSAまでしばしお待ちを。

五箇山 GOKAYAMA-project プロジェクト

D1 森 朋子



▲新緑の中の相倉集落



▲水田が映える菅沼集落

6月25日(土)~27日(月)、7月2日(土)~5日(月)と、2週連続して現地調査を行いました。雪で真っ白だった3月末の初調査から3ヶ月、田植えも終わり青々とした清々しい五箇山です。前半は、相倉・菅沼それぞれの世界遺産集落にて「魅力を語る会」を、後半は、五箇山エリアから「世界遺産マスタープランにかかる若手座談会」を行いました。これまでの個別ヒアリング調査から一転、みなさんに集まって頂いた初めての会合でした。いろいろな人に出会い、いろいろな意見が出て、始動のエンジンがかかったかな、という実感と同時に、今後そのハンドルをどう切っていくのか、市庁内ワーキンググループと共に試行錯誤が始まった、資源調査も同時進行の熱い!五箇山プロジェクトです。

5月に都市デザイン研究室に来て、気づけば7月。怒濤のような忙しさの中で、M1もようやく自分なりの作業の要領を会得してきたようです。前号で扱ったスタジオ以外でもM1は奮闘しております!

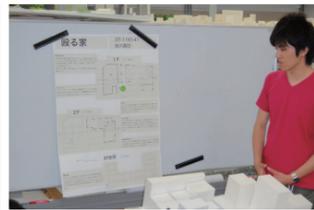
学部3年演習

Collective Housing Design Studio

text_omori



▲完成した1:100の住宅模型



▲北川君の発表

外部出身で設計の経験がないM1の北川(北大土木出身)と大森(都市工環境コース出身)で、学部3年生の演習である、江東区森下の運河沿いの地域を対象とした集合住宅設計演習に参加しています。住宅の設計は初めての経験で、最初は何から取りかかれば良いかも分かりませんでした。研究室の仲間やTAの鈴木さん、前川さん、浅野さんの助けもあり、なんとか前半の小規模集合住宅設計を乗り切ることができました。他の複数のプロジェクトに追われつつ、演習の設計と模型製作をおこなうため、結局両名とも連日徹夜をすることになりましたが、模型が完成したときの達成感がかえがたいものがありました。しかし、後半の大規模集合住宅設計は小規模住宅の比ではない大変さで、非常に苦戦しておりますが、7月末のジュリーまで諦めることなくやり遂げたい所存です。

研究室の最近

卒論生配属と新歓パーティー B4 Welcome Party

149.9号でお伝えしました、都市デザイン研究室の卒論生の歓迎パーティーが行われました。その模様をお伝えします。

M1 安東 政晃

こんにちは、デザ研で5本の指に入る下戸、新コンパ係の安東です。先日、梅雨の陰鬱な空気を晴らしてくれるような4年生がデザ研にやって来ました。ということで6月28日、弥生キャンパスにあるAbreuvoirにて新歓コンパが催されました。今年の4年生は体育会系出身者が多く、その体力を以て院試と卒計を乗り切り、来年からデザ研で活躍してくれることでしょう。また、ご多忙のなか西村先生をはじめ教授陣のみなさんも駆けつけて下さり、みんなでワイワイ立食パーティーを楽しみました。さてさて、次回は夏の暑さを楽しむべく!ビール片手にパーベキューでもしたいな〜と勝手に思っています。「花火がしたい」等のご要望がありましたら安東まで何なりと。



▲卒論生5人は全員男子



▲西村先生を囲んで

人気企画

日本全国OB・OGめぐり 第7弾! デザイン研究室のOB・OGの近況を伝える人気企画。今回は黒瀬助教の同期の若手2名に寄稿していただきました。

計画づくりから場づくりまで

2006年卒 西原 まり

研究室を卒業してから約4年、都市計画のコンサルタントで働いています。主に自治体の仕事が多く、都市計画マスタープランや景観計画、地区計画の策定やそれらの調査業務に関わってきました。

現場のまちづくりの仕事では現在、墨田区の2つの地区で商店街を始めとした地域活性化の仕事に携わっています。まちづくり組織の立ち上げからイベント開催、マップやホームページでの情報発信、さらには地区のキャラクターづくりまで、都市計画にとどまらず幅広く地元の活動を企画、支援しています。また、空き店舗を改装したコミュニティカフェを開設し、地域の核となる拠点づくりを行っており、今後は拠点の運営や自立した活動体制の確立、周辺の空間整備等の課題に向け、地域の人と検討を続けています。規制・誘導型の計画づくりから地域活動の支援、場づくりまで、仕事の内容も必要とされる役割も様々ですが、それもまちづくりの楽しみであると感じています。今後も多くの人と関わりながら、まちの実際の変化につなげ、魅力づくりに貢献できればと考えています。



▲▼東向島地区の交流拠点「玉ノ井カフェ」



▲吾妻橋地区の活性化キャラクター

修士時代の経験と現在

2006年卒 伊藤 晃久

卒業して早5年以上が過ぎましたが、私のデザイン研時代は様々な土地へ足を運び、新しいものに触れられるとても刺激が多い時間でした。研究室のプロジェクトでは広島県の瀬野や岩手県の大野村を訪れ、研究室の仲間と共にまちづくりの提案をさせて頂きましたし、個人では時間を見つけては海外旅行に出かけ、欧州、中近東、アジアと沢山の国々を歩いて回りました。卒業後は全く畑違いのメーカーであるHONDAに勤め、そこで経理の仕事を行っております。最初の4年間は三重県にある工場に生産に関わる費用管理の仕事を行い、予算編成や原価計算という仕事を行ってきました。昨年は東京の本社に転勤になり現在は主に収益見通しの作成という仕事を行っております。よくテレビや新聞である企業の今期末の収益は~億円になる見通し、という報道を目にしますが、HONDAがこういった発表を行うのを目にしましたら、その一部は私が算出している事を思い出して頂けたら幸いです。

Information

7月の予定

7月 9日~16日	ルンビニPJ現地調査
7月 9日~10日	駒PJ現地調査
7月 13日~14日	足助PJ現地調査
7月 14日~15日	駒PJ現地調査
7月 20日	清水PJ現地調査
7月 27日	2011年度第7回研究会議

編集後記

大森 文彦

初の編集担当が特大号となり色々大変でしたが、なんとか乗り切ることができました。さて、最近自転車にはまっておりまして、クロスバイクで荒川の河川敷まで行き、まっすぐのサイクリングロードを全速力で駆け抜けることにひとしおの快感を覚えている次第です。クロスバイクは自分でも怖いくらいのスピードが出るので、その恐怖と爽快感の不均衡を楽しむ、そんなひとりの休日。いやー、気づいたら駒込の自宅から葛西の荒川河口まで来ておりました。帰りがしんどいことしんどいこと。研究室生活に加え、休日の過ごし方もまさに自転車操業。お後がよろしいようで。